

「主宰の言葉より」その3―俳句は祈りです―

今瀬 一博

「対岸」創刊三十周年記念号では、「剛一語録―心に残る主宰の一言―」という特集が組まれました。当時の成井侃編集長はこの記念号の意味を、「創刊号の原点に立ち帰って主宰の考える『俳句は大きな感動を根底に据えている点において詩であると考えている』この創刊の言葉を再度『対岸』人に、そして俳壇に向けて発信できればと考えている」と書きましたが、その発信のための具体的な企画の一つがこの特集でした。この中で同人の岡崎桂子さんが、心に残った主宰の言葉としてあげたのが、「俳句は祈りです」でした。その時の同氏の文章の書き出しは「東日本大震災において主宰は二五〇句の作品を発表した。直後の五、六月号で各十句、二十五周年特集で二三〇句である。県内各地の被災地を前に、俳句を詠むこと、ただただ祈ること、鎮魂することだったと言う。」でした。本稿では前回まで「あはれの表現者」という副題のもとに書き進めてきましたが、「あはれ」と「祈り」の関係を言えば、「あはれの先にあつて、あはれに対する人の最も自然な向き合い方の一つ」が、「祈り」であるとも言えます。そこで今回は、「俳句は祈りです」という主宰の言葉に着目して、その真意を考えてみたいと思います。

本題に入る前に、この「祈り」という言葉は、様々な意味を含

む大きな言葉ですので、まずその意味から確認をしておきます。

「祈り」は、一般的には「祈願・祈祷」の意味で、「神仏などに對して、自分の願いや思いを伝えること」ですが、「願ひ」の目的が主に自分の内なる要求や欲求を満たすことに向かうのに対し、「祈り」は自分の心を自分よりも大いなる存在の前に置き、自分の心を鎮め、思いや行動を本来あるべき姿に正すという意味が強くあります。「祈る」の語源は、「齋(い) + 宣(の)る」で、「神聖な言葉を口に出す」というのが原義で(『日本語文法大辞典』より)、そこから大きく次の三つの意味が出てきます。則ち①特定の目標達成などを、自分よりも大きな存在に請い願う「神仏への願ひ(祈願・祈祷)」の意味。②神仏に感謝を捧げ心中を打ち明ける「感謝と対話」の意味。そして③自分のためだけでなく他者のためにも祈る「他者への思いやり」の三つです。①は新年の初詣に始まり、夏祭等の祈願の行事、知恵詣や七五三詣等が代表的な例でしょう。②は秋祭などが代表的で、種々のお礼参りも、これに当たります。③は特定の立場にある方が司ることも多いでしょうが、親が子のため、子が親のため、地域の長が全体のために「祈る」ように、特定の人間関係の中での「祈り」は一般的に行われます。こうしてみてくると、「祈り」の①②③の意味のいずれも、剛一俳句はバランスよく充たしており、例句をあげれば切りがありません。このバランスの良さも剛一俳句の魅力でしょう。「俳句は祈りです」と言った言葉の裏には、そのような確信や自負があつたのかも知れません。ところで剛一主宰にとっての「自分よりも大きな存在」と言えば、人間から全ての動植物まで含む自然そのものです。この自然観も確認しておかなければ、「俳句は祈りです」という言葉の真意に迫れません。

主宰の自然への接し方を考える際には、『山河随吟』というエッセイ集などが参考になります。自然に慣れ親しんできた人にとって、時折その自然を「怖い」と感じることはありませんが、この本の中の「川」というテーマで書かれた小文には、川の怖さが綴られています。文は、「私にとつて川は藤井川を意味する」と書きだされ、子どもの頃から慣れ親しんできた川であること、一度だけすごい氾濫をしたことがあった怖ろしさが語られます。後半は、正月に掲げた餅を川に供える「かつぱれ餅」の風習のこと等も書かれます。どれも川を利用すると言うより、川に親しみ恐れ敬うといった書き方です。この態度は身の回りの動植物に向かう際にも同様で、様々な他の随筆からも窺い知ることができます。祖母が庭先の墓に線香をあげて「これは御先祖様ですよ」と言っている話。祖父が「狐火」を見た話。庭の二本の「ハンカチの木」をうっかり人の前で比較したため、次の年から片方が花を咲かせなくなった話。どの話にも、根底には自然への恐れや敬いの気持ちがあります。このような自然への向き合い方への理解無くして、剛一俳句の鑑賞はできません。ところで主宰の好きな季語に、「山笑ふ」「山眠る」があり、例句も多いのですが、この季語の擬人的な表現の奥には、山という自然への畏敬の念、祈りの心があります。ですから剛一句にこれらの季語の使用頻度が高いのは、当然のことと言えます。

頂上の神もろとも山眠る

『地力』

この句は、震災前の句ですが、「山眠る」という季語を用いて、しかも自然への畏敬の念が素直に出た作品と言えるでしょう。

では前置きが長くなりましたが、本稿では、震災後の日々の中で「俳句は祈りです」という言葉が語られたことを踏まえ、主宰

の震災句から「祈り」の心が感じられる例句を引いて、この言葉の真意を考えてみたいと思います。

結論から申し上げると、震災直後の作品は、まだまだその衝撃の大きさから、「祈り」の心が湧くまでに澄んではいけません。

震災直後の平成二十三年五月号は、

踏青の途中地震に弾かれし

に始まり、句集『地力』の題名ともなった

芽吹くなり地を突き上げる地の力

で結びますが、震災の衝撃を詠んだ句が多く「祈り」の心は表面には表れません。ただ一句目で、地震の揺れを「弾かれし」と把握するあたり、天災ではありますが自然との距離の近さが伺えます。二句目も、普通「地震」の一言で済むところを「地の力」と把握するあたりに、自然との接し方の特徴が見て取れます。どちらも随想等に表れた自然との接し方の延長線上で理解できます。

次の六月号も大半は、震災の衝撃を詠んだ作品で、

液状化現象といふ猫の恋

という震災の影響の大きさを詠んだ句に始まり、

炊き出しの飯白く湯気豊かなり

で結びます。飯の「湯気」には、「祈り」に近いものは感じます。

その後八月号にて、「新作三〇〇」を発表しますが、この中の二三〇句が、東日本大震災を詠んだ作品で、その巻頭が、

仏頭は尊き欠片春の昼

でした。この句は『地力』収録時に

仏頭は尊き欠片春の雪

と直されましたが、「祈り」の心を深く蔵した作品です。(続く)